

郷土資料

昭和四十八年十一月十八日

浄光寺

迎接院

第六十回

史跡めぐり資料

(浄光寺
迎接院)

越谷市郷土研究会

第六十回 史跡めぐり

とき 十一月十八日

午前十時三十分

コース 越谷駅（徒歩にて）

迎接院——七左エ門の墓

浄光寺——北越谷にて解散

会費 一〇〇円

昼食は各自御用意下さい

目次

一 大房村

新編武蔵風土記稿卷二百六
所収郡之八 四三頁より

一 越谷市の文化財

第二集 文化財調査報告書
一九七二年版 市教育委員会

一 大房浄光寺・薬師堂

越谷市の史蹟と伝説 教育委員会編より

大房村

新編武蔵風土記繪卷二百六
埼玉郡之八 四三二頁より

新方領 大房村

大房村は江戸より六里の行程にあり、民戸五十、南は大沢町、北は大林村、東は弥十郎村にして、西は元荒川を隔て、荻島村に及べり、東西十一町、南北五町余、用水は須賀村溜井より引くと水末なれば早損ありと云 古より御料所にして今も替らず、検地は元禄十年酒井河内守糾せり

注 原本片々十、濁点なければ点を省く

○高札場

西の方にあり

○元荒川

北の方を流る
巾二十六間許

○稻荷社

村の鎮守なり十
手院の持下同し

○八幡社

○弁天社

○麻利支天社

○浄光寺

新義真言宗、末田村金剛院末、熊野山
観音院と号す 本尊十二面観音を安置す

鐘樓

宝暦六年鋳造の鐘
をかく

○千手院

同門徒熊野山不動尊と号す
本尊不動を安置す

◎東光院

同宗三宮村一乘院内徒
本尊阿彌陀を安置す

◎葉師堂

相伝へて大同二年、飛騨工が一夜に建立
せしと云、さばあれ一夜に建てしなど
奇説論をまたす、古よりの像は元年賊のために失
たしかは、今の像を安置せり、此の葉師と押入の葉
師と唱う、其の美は知らず、慶安五年
五石の御朱印を賜えり、浄光寺の持

◎五知堂

十手院の
持なり

◎地蔵堂

注 年号

- 1. 元禄十年 検地 丁五 一六九五 二七七年前
- 2. 宝暦六年 (鐘) 丙子 一七五六 二一六年
- 3. 大同二年 丁亥 八・七 一六五年前

注 真言宗

中国の回教を空海が伝えて、新教の呪文を
新しく日本で用いた大乗佛教の一宗派、大日
経と金剛教を根本教義とする。印を結び呪文
を唱えて、陀羅尼の加持力で生き身のまま
ただちに佛になる 即身成仏ととく、

東密、真言密教 秘密宗、密宗

越谷市の文化財

第二集 文化財調査報告書
一九七三年版 市教育委員会
十二頁 中央

薬師來座像

所在地 越谷市北越谷 番
薬師堂内

浄光寺薬師堂内に在り、高さ三川の座像で直径一・五川の蓮華台に「結跏趺座し、左を跏座の上に仰けにのせ、右手を正面に向けている。松の材に絹張りをして塗装されている。作者、製作年代については現在不明である。またこの如來像には十二神像も完全にそろっており、この種のものは珍しい。

五智如來像

所在地 越谷市北越谷 薬師堂境内

薬師堂境内にあり、高さ一六川の青銅製の立像である。五智如來とは五智を体得する仏身で阿内像、宝生像、弥勒像、釈迦像、大日像とす。

建立年代は、享保三戊辰（一七二八年十月十五）に、釈迦・弥勒・宝生・大日・阿内の蓮台に刻まれていることが知られるが、由來等については現在不明である。

註

結跏趺座 け、かぶざ 仏法の座法の一つ

両ひざを曲げて、両足を組み、足の裏を上向きにして座る

跏 け、足の裏、跌は足の表の意

別半跏趺座 未だ仏法の未熟な者が座る方法、台足の裏のみ上に向け、左は右ひざの下におく

座り方

修證義など「説経」やりながら行う時に、或は半跏趺座の話が出るが、このことである。

大房淨光寺薬師堂

越谷市の文蹟と伝説

教育委員会編より

日光街道を越谷宿大沢宿を経て日光に至る街道筋に江戸中期より將軍の御獵場として發達した其の一角に当時大森林があり、主として松杉が多かつた。

「今も老松が残つてゐるしこの十町七反の一角に薬師堂がある。當時鴨の森の薬師堂とも呼ばれ「大江りの薬師堂とも言われた。

「大江り」とは、元荒川がこの一角を流れ、潮の干満によりこの薬師堂の位置迄海水し、又引き潮の時は入江の如き地形を形成する所から、享保年間から明治の中期まで大江りの薬師堂とも呼ばれていた。現在この辺一帯までが往古の原型を小高い岡と元荒川の支流らしき小堀をとどめるのみで、樹令約四百年位と思われる大銀杏の大木と老松が生い繁り本堂がそのまゝ残つてゐる。其の外当時の敷石と思われる石片が小高い岡の週辺に散在してゐる。

古老の言に依れば、八。六年大同元年（今

より十百六十六年前建設されたものと云う。而し敷地の火災では、きりした根柢は得られない。現在の建築は大門前から運ばれた建築材をもつて「元禄年間造築されたもの」とされているがその年代は明確でない。古老の言によると、日光の御法王に参加のため飛騨の甚五郎が江戸より日光へ行く途中八月の夕暮れ時、大夕立に逢い一夜の雨宿りをした為、当薬師堂へ仮宿し雷雨をさけて、その時の御礼にと云うので、一夜にして建立したものとされているが、日光の關係で工事半ばにして日光に立ち去つていった。其の当時薬師堂で準備した建築資材の中で「うるし十貫、朱十貫を建築甲に用意したが未完成のままなると朝夕、陽の照らす場所に埋めてそのまま現在に至つてゐるとの伝説があり、又床下に埋まつてゐるとの伝説も伝えてある。朝夕陽のさす所では小高い岡となつてゐるところと思われる。建築様式は廂口四間、奥行四間の単層屋根四注造りの四角堂で茅葺である。現在はこの上にトタン屋根を被つてある。

当時屋根の上に東西に分れて「竈」とひめし

の彫りものが上げられていた。四方勾蘭廻縁で繞らしてあったが現今は勾蘭は見られない。欄間には意の彫刻も立派なもので用材は檜の木目である。

本堂内部の「こまよせ」の前に元禄十年十月一日の主匠とかけられた額があり五十二と三十川位の矩形の部厚い板の額である。本尊は薬師如来像である。

薬師如来像の座像

高さ三米の坐像

で直径二米五十七センチの蓮華台に結跏趺座し左手を跏趺座の上に仰むけに戴せ右手を正面に向けている。絵の木の材木に細張りで塗装されていり、製作者と思われる人物がひざの部分に京都三条上ルと書いてある（註 京都三条の住人奉る。奉納者にして製作者ではない）氏名は現在絹張りをはかせないのでわからないが、相当巨大で立派なものである。

左右に十二神像の立像があるが二度の大地震で首腕のないものもあるが青銅製の武将と粘土性のものがある、着色してあるものは粘土製の方が多い、左右合計二十四の立像で高さが四十五頃である。薬師如来坐像には

佩棧京野度嚙吹呪理也針履者とあり生死の苦患を除く故に薬師王匠と稱し、当時盛に参拜者も多かつた模様であつた、昔八薬師と称し巡礼し元荒川には浪舟が救多く集つたそうである。

古老の言によると大銀杏の梢に旗を立て、これを目標として当時信仰範囲が遠く千葉、梁流山あたりからも来たそうである。当時の民間信仰としてこの如来像は十二の大願を立てられる。

十二の大願とは

- | | | |
|--------|--------|---------|
| 一、相好具足 | 五、持戒清淨 | 九、去耶趣正 |
| 二、光明照被 | 六、諸根完具 | 十、息災離苦 |
| 三、所求満足 | 七、除病安樂 | 十一、飢渴飽滿 |
| 四、安立大衆 | 八、転女成男 | 十二、莊具豐滿 |

のこれである。この中で第七番の本願は「我が名号を一度耳に経れば衆病悉く除き身心安樂なり」とある。この第七願によって薬師如来と称する様になつたわけは蓮華台に住し、左手を跏趺座の上に仰けに衆を正面に向けられているのは衆生に法性を流に法衆を施す

して無明妄想の疾愚を癒すことを本誓念願として、彫りが荒けすりであるが均整のとれた象徴的な名作である。高さ約五〇センチである。古老の言によれば、甚五郎の作と言われている。

新編武蔵風土記稿卷二五三 寺郡之五

○四町野村 四町野村は江戸よりの行程用水等前村に同じ、家数六十六、東は越々谷宿

南は谷中村、西は神明下村、北は元荒川を隔て大房村なり、東西四町餘、南北へ三町餘、水旱ともに患ふ、正保の頃は御料所なりしが其後伊賀守に賜ひ、宝曆六年上りて御料所に復し今も同じ、検地は元禄八年酒井河内守改む。

高札場 村の西にあり

小名 押切組 御梶先祖 野尻村

元荒川 村の北を流る、川巾四十町餘、川添に堤を築く

又伊豆社

天文四年の勅諭と云、当村及び世谷宿・大洗町・反曾根村・神明下村・谷中村・花田村等、所の惣領守とす、近橋院の持、下同じ

○神明社 ○稻荷社 ○浅間社 ○愛宕社

私誓寺の持 ○稻荷社 村民の村

迎攝院 新義真言宗、本町村金剛院末、越谷山神宮寺と号す、天正十九年寺領五石の御朱印を賜ふ

当院は天文四年僧賢深中興、用基すと云ふ本尊は本院に安す 鐘樓 寛永二年の鐘は破製し

て安永八年六月再鑄の鐘とかけり 観音堂

天神社 ○地藏院 迎攝院の口伝より靈山六道寺と号す、慶長八年尊深造立せり、本尊地藏と安す

○弘誓寺 同宗、反曾根村照蓮院門徒、清龍山観音院と号す、文禄三年中興、扇山尊清再建せり、本尊十

手観音と安す 稻荷社 ○薬王寺 同門徒、扇山東光院と号す、大塚

元年長広と云ふ僧中興せり、本尊不動と安す 薬師堂 ○十王堂 弘誓寺持

○七左衛門村 附持漆新田 七左衛門村は騎西庄

と云、當村は寛永の頃には、神明下村の里正と載せ、元禄の改には今の村名に出たり、家

數百十四、東は登戸村、南は大開野村、西は越巻村、北は谷中村なり、東西六町半、南北

二十五町許、世人越々谷糲米とて、上品とするは當所の産と云、原莞の後より御料所なり

しが、元禄十三年平岡主殿・曾共七兵衛・長山三郎・菅谷某・中條某に賜ひ、其餘は御料所にて今子孫平岡石見守・曾共豊後守・長山三郎・菅谷平八郎・中條鉄太郎等が米地及び御料所なり、用水江戸よりの里敷検地の年代は前村に同じ、又後年新用の地あり、享保十八年三月寛橋磨守亂し、安永八年十二月伊奈半左衛門改め、共に御料所にして持添の地なり、

高札場三ヶ所

小名 上組 四ッ谷 前谷 根郷 中組 下組

古後瀬瀬川 村の西を流る、川巾八間許り、
○新後瀬瀬川 村の西界にて川巾十二間許り、

いづの頃には、此の川を通じて二條となりしより、昔の名あり、今此流れも是五郎の号とす、何れも川添ひに水除の堤を設く、

稻荷社 村の領守とす、眞福寺の坪なり、下同し、
○天神社 ○山王社

観照院 村の領守とす、眞福寺の坪なり、下同し、
○荒神社 村の領守とす、眞福寺の坪なり、下同し、
○稻荷社六守

観照院 新義、眞言宗、末田村金剛院末、日取山と号す、扇山尊度又僧宿辨承応三年甲興せり、扇基は当村と

扇望せし金田七五門にて、其法名日取観照と号す、以て、山号、寺号とす、本尊は弥陀と安す、
鐘樓 明和三年角

この鐘と 稻荷社 比未社として、天神、
虎磨神の二社と置 観音堂

○持福院 観照院内從日照山と号す、本尊弥陀を安す、兵主大沼明神社

○眞福寺 扇内從實相山と号す、本尊上に同じ

○神明下村 神明下村は此地に太神宮あるをもて起りし村名と云、江戸より行程六里餘、

家敷五十九、東は元瓦川を隔て大房村、南は四町野村、西は西新井村、北は荻島村なり、

東西へ六町餘、南北十六町許り、用水は前に同じ、正保の頃は御料所に属す、又村内神明の

後起中に、寛文中土屋相模守當所を領せしことを載す、されは其頃は彼の領分にて、後

又御料に復せしにや、元禄十三年村を六分に

して、平岡主殿・曾共七兵衛・菅谷某、長山彌三郎・中條某に賜ひ、餘は御料所にて、今

其子孫平岡石見守・曾共豊後守、菅谷平八郎

長山彌三郎・中條鉄太郎知行及び御料所なり、

高札場六ヶ所 御料は村の子の方、私領三ヶ所、
口キの方、二ヶ所は坤にあり

小名 在泉 沖谷 萩葉 前方 後方
元瓦川 村の東より美へ流る、川巾三十間より、
四十間にいたる、川添に堤を設く、

太神宮 村の領守とす、
別當大行院 本山修験、百餘部、
寺す不切院殿下

本尊は正観音と
本地佛となす

○熊野社 政重院の所

○拾所社 下町

○天王社

○天神社

○八幡社

政重院

新美真言宗四所野村迎福院門徒、月向と号す、此院は村民七々門の祖毛会田と云ふ門政重、甚慶譽

海定尼道福のために還俗す、徳礼に寛永十九年閏月廿日とあり、此政重と云は、全曰末厨に三郎左門正重と云ものをのす、月人にやさもあらば、比保十郎氏房に居せしものなり、慶長は元和八年六月二十日に死せり、又山号は後妻のは名に、本尊は観音は、政重が守護佛なりといひ候えり、

○最勝院

同内供、本尊
不効と安す。

○清光坊

村持、本尊
不効と安す。

自由欄

